みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

モンゴル風物誌：ことわざに文化を読む

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4580

生
活

帽子

――虚飾の手段

衣服をめぐることわざがいくつかあるなかで、もっとも特徴的な意味が付与されているのは帽子である。そもそも、衣服はからだをおおうものだから、おうおうにして虚飾や見栄の表徴となりやすい。そうした衣服の典型的な素材として、帽子が存在している。

「帽子をかぶっても頭は逆三角形
コートをはおっても肩は逆三角形」

表面をとりつくろっても、実態は変わらない。こうして帽子はごまかしの手段として登場する。

「帽子の外にまた帽子
綿靴の外にまた綿靴」

「屋上に屋を架す」あるいは「屋下に屋を架す」ということわざに類似している。たしかに帽子を二重にかぶっても無駄なことであろう。モンゴルではほかに「鞍のうえに鞍」という省略形もあるが、帽子がたとえにもちだされている場合は、単に無駄な上塗りが表現されるばかりでなく、見栄っぱりや虚飾を非難する意味もさらにつけくわわっている。

右の二つのことわざのように、帽子とセットに配列されているのは、コートや綿靴で、もちろん頭韻をふんでおり、いずれも衣服の一部である。しかも、衣服のなかでも必要最低限のものではなく、どちらかといえば過剰なものであるといえよう。それらと並行させることでますます虚飾のイメージが強化されているにちがいない。

帽子は帽子でもとりわけ「高い帽子」となると、虚勢や虚栄を意味するようになる。

「高い帽子は風に」

「高い帽子をかぶった人は
輿に乗ってはならない」

高い帽子をかぶっていると、風にあたりやすい。また屋根のある車に乗ると、きっと帽子が屋根にひっかかるだろう。風や車の屋根のために、帽子を落としかねない。いずれのことわざも、実

力にみあわない高い地位にある人や、実力不相応な名誉をもとめる人を非難することわざである。

一般に、「お世辞をいわないで」という意味で、モンゴル語では「高い帽子を着せないでください」と表現する。つまり、「高い帽子」というものは、人がかぶせれば「お世辞」になり、自分でかぶれば「高慢」になるのである。

以上のように、ことわざの世界におけるモンゴルの帽子は、実態や実力をごまかす格好の手段である。ただし、それは威風堂々とかぶろうとする場合であって、かぶりかたによってはつぎのように意味もちがってくる。

「帽子をななめにかぶり
綿靴をひきずる」

よれよれの帽子をどうにかこうにかかぶっている。これでは、貧困さがおのずとあらわれてしまうことになろう。「糊口をしのぐ」さまがえがかれているのである。

帽子をかぶることが一種の見栄であるなら、帽子をぬぐことはいったいなにを意味するのだろうか。つぎのように、遠慮の無さを意味する行為としてことわざにもちいられている。

「帽子をぬいだら、わたしたちの家
あした行くなら、あなたの家」

帽子をぬいだその瞬間から、すぐさまわが家としてくつろぎ、出発するとなればただちにもはやわが家ではなくなる。どこへ行っても遠慮しないという意味であり、主として、つねに外遊して遠慮へだたりのない性格を身につけた実直な人柄をさすという。この場合、無遠慮というのは、けっしてマイナスの評価をあたえられるべき人柄ではないらしい。

もし万一、挨拶に際しても帽子をかぶったままなら、帽子をかぶったままでいることが無遠慮というものであろう。

「慣れた仏に
帽子をかぶったままおがむ」

というと、親しんだがゆえに礼儀を欠くことをしめしている。しかし、これとて「親しき仲にも礼儀あり」という訓戒の意図よりも、遠慮のないほど慣れ親しんだことを表現しているという。

移動を是とする人びとにとって、帽子を気軽にぬいでくつろいだり、帽子のままでも気軽に挨拶したりすることが、帽子をいつまでもぬがずに格式ばっているよりも、ずっと好感度の高い行為なのかもしれない。なにしろ、帽子は人の心をかくしたり、人のあいだにへだたりをつくることのできる小道具なのであるから。

つぎのことわざでも、帽子は高慢さを象徴している。

「家畜のある人は
帽子のある嫁をとる」

富裕な人はとかく威張るものだ、という意味をもつことわざであり、帽子をつけた女性と結婚するという行為に、高慢さがあらわされている。帽子に対して高慢なイメージがあるからこそ、このような表現も可能なのである。

このことわざのように、帽子はまたしばしば家畜と対になって登場する。家畜が「マル」で、帽子が「マルガイ」で、二つの単語の最初の発音が一致しているためである。

「家畜は肉で
帽子は房で」

家畜はその肉付きで判断し、帽子はその房で判断せよ、というわけだから、ある程度、外見の判断も必要ではあるらしい。

「家畜は主人をまねる
帽子は頭をまねる」

といえば、「類は友をよぶ」に似た一種の子弟関係を表現することができる。しょせん良い意味になってはいないことがおのずとうかがわれよう。また、

「家畜は弱いものを
　帽子は頭を」

といえば、弱者をさらにいじめることを意味する。これらのことわざにみられる帽子は、虚飾の手段として登場しているわけではない。しかしそれでもやはり、人にあらずしてせいぜい家畜のように、愚かな行為をするものでしかない。表面をとりつくろい、虚勢をはる衣裳としての帽子が、何かの役にたつとすれば、わずかにつぎのような場合にかぎられる。

「頭蓋骨が割れても帽子に
　手が折れても袖に」

骨が折れたり割れたりと、ずいぶん物騒な表現は、いずれも仲間うちのもめごとを比喩している。仲間うちの恥は外へもらすまいぞ、という意味をこめたことわざである。「頭が割れても帽子のなかに、肘が折れても袖のなかに」といってもよい。派閥内部の争いをなんとかかくしとおす気な

ら、せいぜい大きな帽子を用意するがよかろう。

帽子がさらに多義的に利用される例として、つぎのようなことわざもある。

「落ちた帽子をひろわない
出会った人と話さない」

それほど忙しいという形容になる。また、

「肉の堆積
帽子掛け」

といえば、生きているだけの役立たずを意味する。肉と帽子も頭韻をふむので並列されやすい。

「肉を食べて
帽子をわすれる」

とは、「衣食足りて、礼節を知る」のちょうど反対のような行動である。食に夢中になるあまり、礼節の衣をわすれるのであるから。

シラミ　――小さな悪魔

衣服に関連して、ことわざの世界でどうしてもみのがすことのできないほど活躍している小動物がいる。シラミである。日本のことわざのなかでも、シラミはノミとともに小ささの象徴として登場しており、小さきことの事実にかわりはない。ただ、モンゴルことわざ界のシラミたちはずっと行動力にまさっているようである。まずは、小ささが表現されている一連のことわざを確認しておこう。

「蚊に刀
シラミに包丁」

「シラミに小刀を出す」

といえば、もはやその意味はあきらかであろう。「シラミの皮をなたではぐ」ということわざが、ここモンゴルではより簡潔に表現されている。「ニワトリをさくにいずくんぞ牛刀をもちいん」などと大仰にいわずとも、このように簡単にいうだけで、些細なことにたいそうな方法をもちいることの不適切さは表現できるのである。

「ウズラの肉でシュースをつくる
シラミの油でゾルをつくる」

シュースとは、ヒツジ一頭分を煮て盛り合わせたごちそうをさしている。ゾルとはバターをつかった灯明をいう。ヒツジの肉のかわりにウズラの肉ですませ、バターのかわりにシラミの油ですませるなどとは、かなりのけちといわざるをえない。極度な吝嗇(りんしょく)ぶりをえがいたことわざである。日本でも「シラミの皮むき」とか「シラミの皮を千枚にはぐ」というから、小さなシラミを素材にして貪欲を表現する方法は、どうやらかなり普遍的なレトリックであるらしい。

シラミが小さくてつまらないものを意味することは普遍的であるとしても、日本ならこれほど大きなものと対比されることはまずあるまい。

「自分のからだにいる灰色のシカを見ないで
他人のからだにいる多くのシラミを見る」

「自分のからだにラクダがいても見えない
他人のからだにシラミがいても見える」

自分の欠点を棚にあげて他人の欠点をとやかく追求することを意味している。いわば、「人の一寸、わが一尺」であり、「わが八難をおいて、人の七難をかぞえる」である。

それにしても、シカやラクダとシラミとではあまりにもその対比が大きいではないか。一寸と一尺や、七と八などといった対比とはくらべものにもならないほどの差異がある。こうした誇張の大きさは、モンゴル流のレトリックの一つの特徴であるといえよう。

右のことわざでは、シラミは小さきもの、つまらないものにとどまらず、欠点や短所や失敗などをあらわしている。シラミは、小さいながらも相当に厄介なものであるからにほかならない。

「シラミになやまされて
衣服をもやす」

些細な障害から大損を出しているさまは、「貧すれば鈍する」に似ている。また問題を解決しようとしてかえって失敗するのだから、「角をためてウシをころす」に類義の句であるともいえよう。

些細な障害のために、つぎのことわざのように失敗するかもしれないので、たとえ才能があっ

たとしてもうぬぼれてはなるまい。「河童の河ながれ」や「猿も木から落ちる」ように、

「相撲力士が
　シラミにつまづく」

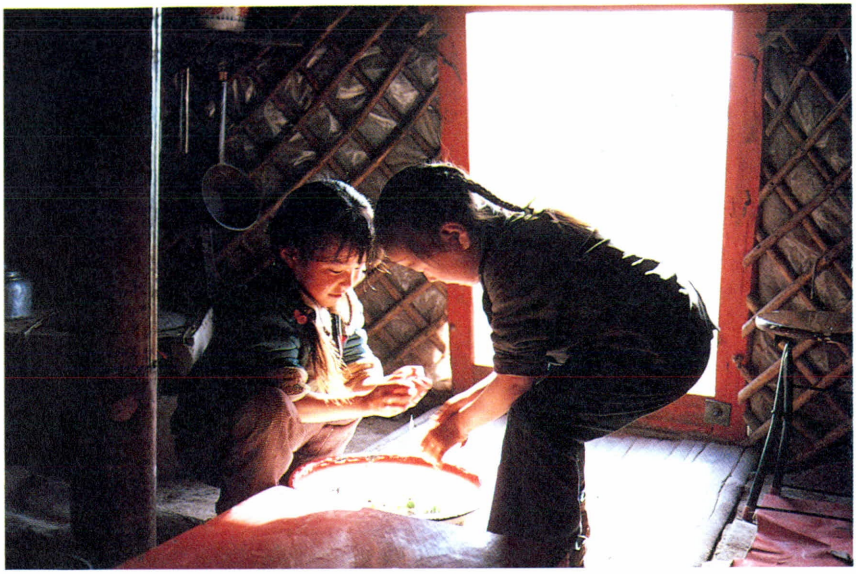
また、些細なことといえども、指摘されると気になって気になってしかたがないものである。つぎのように、悩みの種と化してしまう。

「おまえの衿のシラミ
　おまえの鎖骨のとげ」

さらにまた、過失があれば心おだやかではいられないということを、シラミに登場ねがってつぎのように表現する。

「股にシラミのいる人は
　机をまえにしてすわれない」

シラミによって冤罪を表現することもできる。



毎朝，水は大切に使う

「他人のシラミのついた服を
頭にかぶせる」

他人のしくじりを、自分の責任にさせられてはたまらない。シラミのかゆみを想像するなら、とてもこんな冤罪はたえられないという気にもなろう。

このように、シラミは小さいながらも、悩みや欠陥や過失の意味をおおいにないながら、ことわざの世界に頻繁に登場する。

草原にくらす人びとのなかには、一生のあいだ一度も風呂に入らない人もいる。きわめて乾燥した気候であるから、汗は自然にかわいてゆくし、かならずしも風呂に入る必要はない。入る習慣がなければ入りたいという欲求も生じない。風呂に入ることがまれなように、洗濯の回数も少ない。汗はかわいてしまうのだし、乾燥していれば臭さも感じないし、洗濯回数が少なくてもこまらない。ただ、その結果として、シラミの天下になりやすい。その生活様式ゆえに、シラミにとっては活躍しやすい舞台が用意されている、といってもよかろう。

「シラミは（シラミの）卵に命じ
卵は私には目がないと言って行かない」

怠け者同士がたがいに仕事をおしつけあっている様子として、シラミとシラミの卵をえがいて、人頼みすることを非難している。モンゴル語には、シラミばかりでなく、その卵をあらわす特定の単語さえも用意されているのである。

小さな悪もはびこると大きな災いになるのは必定であろう。

「ネズミが主人になれば災い
（シラミの）卵がふえればシラミ」

「シラミがオオカミになり
官吏が閻魔大王になる」

シラミにこんなにまであばれまわられては、いてもたってもいられまい。机のまえにすわろうものなら、ついつい身もだえして、がたがたと音をたててしまうにちがいない。

脂肪

――豊かさのあかし

草原の食卓には二つの主食がある。一つは、「白い食べもの」と総称される乳およびその加工品であり、もう一つは、「赤い食べもの」と総称される肉類である。白食のなかでも、赤食のなかでも、最高のごちそう部分は脂肪である。

肉類における脂肪すなわち獣脂は、モンゴル語では「オーフ」とよばれる。とりわけ、ヒツジの脂肪片は、主人が賓客に手ずからさしだしてそのまま客に飲み込ませることもあるほど最高級の部位である。ことわざの世界の食卓に登場する場合でも、脂肪片はまさしくごちそうにほかならない。

「あすの脂肪より
きょうの肺」

「あとの脂肪より
さきの肺」

日本でならさしずめ「あすの百よりきょうの五十」といい、「さきの千両よりいまの十両」という。ごちそうである脂肪と対応させられている肺は、さほど上等な内臓ではないことが容易に想像されよう。味覚の好みは人それぞれだが、文化的に意味づけされたおいしさのランクからいえば、肺は脂肪よりはるかにおとる部位なのである。

たとえ大きくてもいまだ不確実な利よりは、小さくても確実な利のほうがよい、というポリシーは共通している。おなじ思想ではあるが、百や五十の数字だとか、千や十の金額などで表現するかわりに、モンゴルではもっとリアルな食べもので表現してしまう。

脂肪がもっともふんだんにつまっているのは、尾の部分であるから、脂肪のかわりに尾という語彙をもちいて、「あとの尾より、さきの肺」「あとで食べる尾より、いま食べる肺」と表現することもある。

脂肪と対比されてしまうと、肉のどんな部位でも見劣りがする。ましてや、腺では、リンパ腺であれ甲状腺であれ、まったく栄養面でも、味覚の面でも比較にならない。この脂肪と腺とをセットにしたことわざがある。

「脂肪でもなく

腺でもない」

どちらでもないのだから、良くも悪くもないという意味である。「帯に短し、たすきに長し」といったところであろうか。

肉の盛りあわせのなかから、人は自由自在に脂肪片をとりあって食べるものではない。食卓にはかならず配分のルールがある。脂肪は、家の主人からあたえられるものだから、「脂肪をくれた人」には特別の意味がこめられている。

「脂肪をくれた人と
　昼夜の別なくけんか」

「脂肪をくれた人と
　朝夕の別なく口論する」

いずれも、恩人とのあらそいがえがかれており、「恩を仇でかえす」ことをこのように表現する。

恩をわすれたあさましい行動は、すでにいくつかの例をあげておいたように、しばしば家畜の行動で比喩されるが、恩についてはこのように脂肪と関連づけて表現することもできるのである。

ごちそうである脂肪は、上質なものの代表であり、つぎのようなことわざもしたてられている。

「卵から骨をさがし
脂肪から筋をさがす」

「卵から傷をさがし
脂肪から骨をさがす」

卵や脂肪のように良いものから、骨や筋を傷のようにさがすのだから、過度なあらさがしを意味することは明白であろう。「毛をふいて傷をもとむ」に類似したことわざである。

獣脂を「オーフ」という一方で、「トス」といえば、より広義な油を意味する。植物油も「トス」にふくまれるし、機械油などの新しい物質もまた「トス」の一種とされる。とはいえ、本来は、獣脂肪と乳脂肪とに二分される脂肪の意である。モンゴルでの「トス（油）」はもっぱら「ごちそう」として理解すべき食品であるからこそ、つぎのようにことわざにいう。

「油の内側
ほこりの外側」

いいものを食べて仕事はしない、という怠惰さが風刺されている。

油は「ごちそう」であるからこそ、「貴重なもの」の代表にもなりうる。

「砂の上に油をそそぐ」

というと、かなりの無駄を意味することになろう。

「貴重」な「ごちそう」である油にはまた、「富」という文化的な意味があたえられており、「豊かさ」のあかしになる。そのことを逆手につかえば、つぎのようなみせかけも可能となる。

「水であらって
油をぬる」

巧みなごまかしを意味した表現である。ここでの水と油は相性の悪いものとして並列されているのではない。水も油もごまかしの手段になっている。

つぎのことわざの場合には、水と油とに対比的な意味があたえられている。

「言うのは油
するのは水」

正月のごちそうはヒツジの脂肪尾

水は、いうまでもなく草原の遊牧生活にとってきわめて貴重な生活資源であるが、こうして油と対比されてしまうと、よいことよりもむしろつまらないことを象徴してしまう。ことわざ全体としては、いかに美辞麗句をいい、礼儀正しいようでいても、実際には無意味な行動をすることを非難しているという。いわば、論語にいう「巧言令色すくなし仁」に相当しよう。

そのような水と油の対比を、つぎのようにもちいれば、自力更生をすすめることになる。

「人の意志で油をのむより
おのれの意志で水をのめ」

ところで、ヒツジなどのゆで肉を食べれば、ふつう、口のまわりが油でよごれるものである。そのことを応用すると、つぎのようなごまかしも可能となる。

「唇に油をつけて
肉を食べたという」

という表現によって、貧乏なのに富裕にみせかけたり、そらぞらしくもったいぶる人をからかうことができる。唇に油をつけるのは、唇を乾燥からまもる美容のためではなく、ここモンゴルでは虚栄心のなせる行為なのである。

脂肪片やバターを食べるとついつい唇をふいてしまう。つぎのような表現は、ふとした行動からどんなこともかくせないものだ、という真理を意味する。「隠すよりあらわる」のである。

「油を食べた人は唇をぬぐい
絹を着た人はからだをはらう」

富や豊かさの象徴である油は、贅沢品といってもよい。油は「トス」という一方で、絹は「トルゴン」とよばれる。頭韻をふむことのできるこのふたつの語彙をセットにすれば、なおさら贅沢品としてのイメージが強化されよう。

「絹のうえに遊び
油のうえにころがる」

といえば、贅沢三昧の生活や甘やかしを意味する。
贅沢品をつかえば、表面をとりつくろうこともできようが、

「油をのんでも大便は黒い
絹を着ても影は黒い」

というように、どんなにとりつくろっても、人の品性というものはかくせない。便も影も、黒っぽいのが当然ながら、ことさら黒いと表現しているからには、善良ではない品性を意味している。

以上のように、獣脂肪や乳脂肪といった油は、まさに「ごちそう」であり、「富裕」のあかしであり、「贅沢」なものの典型でもある。そして、みずから食べるのではなく他人にあたえれば、「善」や「恩」の象徴にもなりうる。

つぎのふたつのことわざは、まったく逆の現象を指摘しているが、油が「善意」を形容し、また「恩恵」を象徴しているという点では共通している。

「油のような意を凝結させる
乳のような心を凝固させる」

「油のお返しは脂肪
一歳子ウシのお返しは二歳子ウシ」

前者は、人の善意をだいなしにすることを、後者は、人の恩義にむくいることを、それぞれ意味していることはもはや明白であろう。

乳製品

――善意の象徴

「白い食べもの」と総じてよばれる乳製品のうち、バターについては脂肪の項で言及したので、その他の乳製品をことわざの食卓からさがしてみよう。まず、乳製品になるまえの原料の乳は、つぎのようなことわざに登場している。

「口についた乳をぬぐっていない
碗に入った食にはたえられない」

まだ器に盛ったごはんを食べることができないほど幼少であることをさし、ひいてはそれほど幼稚だという非難にもちいることわざである。いわば「嘴(くちばし)が黄色い」に相当している。このようなことわざの場合、乳はいわゆる乳児の食物として登場していることになる。乳が赤ん坊にとって唯一最大の栄養食品であることは万国共通であるものの、つぎのような表現ともなれば、つね日

頃、乳を加工し、日常食としている食習慣が背後になければ、成立しえないだろう。

「乳でやけどをした人は
ヨーグルトをふく」

「乳に指をつけたことはない
群れに竿をさしたことはない」

前者はまさに「あつものにこりて、なますをふく」と同義である。後者は、他人の権利をおかしていないという意味であるという。

一般に、モンゴルでは白が善を象徴する色であり、白い食品は脂肪にかぎらず、善や恩の表徴となりうる。「因果応報」をしめすつぎのことわざにみるように、乳ないし乳脂肪に対してはつねに「善」というプラスの評価があたえられている。

「悪意のさきに血
善意のさきに乳」

同様のことわざとして、「善意のさきに乳、悪意のさきに煤」「罵倒のさきは血、祝詞のさきは油」

などがある。このようなことわざにおける血とは、血をながすこと、すなわち殺害であって、いわば仇に相当するであろう。したがって、恩である乳とつぎのようにくみあわせれば、「恩を仇でかえす」になる。

「乳のお返しが血」

さらに、食生活の文化は、乳製品のそれぞれの特徴をいかすかたちで、ことわざに反映される。

「エーズギーのように凝固させ
ホールモグのようにまぜあわせる」

エーズギーとは酸乳をかためたチーズの一種であり、ホールモグとはすっぱくなった酸乳に生乳などをまぜてのみやすくしたものである。それぞれの乳製品がもつ特徴をいかした表現をとりながら、ことわざ全体として、自他の区別なくたいへん親しくなった状態をしめすという。このように、協力をとうとぶ表現に、乳製品をもちだすこともできるのである。

各種の乳製品のなかでも、とりわけ上等とされるのは乳脂肪分を多くふくむものである。その典型がバターであることはいうまでもない。「油」としてことわざに登場していたものである。バターのほかに、ウルムとよばれる乳製品もまた、ほとんど乳脂肪のかたまりといってよい。

ウルムは、乳を加工するプロセスにおいて最初の段階でつくるものである。まず、乳を火にかけながら、何度もひしゃくですくいあげているうちに、乳脂肪分が上層にうかんでくる。これをさますと、気泡をたくさんふくんだウエハウス状の生クリームができる。これが、ウルムとよばれる滋養にみちた食品で、その厚さは、乳の脂肪含有量できまるが、通常五ミリメートル程度である。

ウルムは、乳の上にうかんでくる乳脂肪の膜といってよいであろう。だからこそ、つぎのような表現で「虚栄」や「美辞麗句」を暗示するのである。

「ただの水のうえにウルムをうかばせる」

「井戸の水をほめて
二指ほどのウルムをうかばせる」

ここでは、ウルムを「うかばせる」と意訳しているが、原義は「すわらせる」であり、いずれにせよ「ウルムをつくる」という意味である。つくれないものからつくって、いかにも上等にみせかけている。表面を脂肪の膜でおおってただの水であるという実態をかくしている。「巧言令色すくなし仁」に相当することわざを、乳加工という日々の生活技術を応用してたくみに表現しているのである。

整列したヒツジたちの背後から乳をしぼる

肉類

——解剖学の世界へ

遊牧の民は、自分たちが世話をしている家畜を、自分たちの目でめききして、自分たちの手でさばいて、食す。屠殺するときにも、解体するときにも、また食べるときにも、小刀はかかせない。箸はなくとも食事はできるが、刀なくして食事はできない。

遊牧民の食生活にとってもっとも重要な小道具である刀は「ホトガ」とよばれる。これをもちいたつぎのようなことわざは、いったい何を意味しているのだろうか。

「短い尾の上で刀を」

通常このように省略されてしまう。「刀を」のうしろに「折る」という単語をおぎなえばよい。短い尾というのは、尾てい骨のあたりをさしている。屠殺と解体の作業も終わろうというときに、刀が折れるというのである。すなわち、「画龍点睛を欠く」あるいは「九仞(きゅうじん)の功を一簣(き)に欠く」に

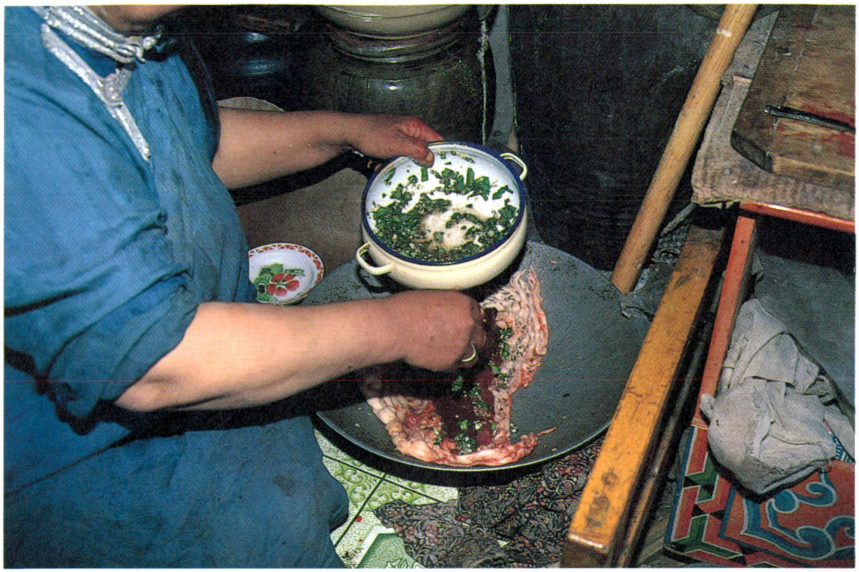
相当する。あと一歩というところまできて不首尾におわることを右のようにたとえるのである。類義のことわざに「終わるときに、さわり」というものもある。

重要だから大切につかっている小刀とはいえ、慎重につかわなければ、いかにも折れやすいときに、折れるものである。とくに骨のなかにある髄を食べるときなどは、刃がこぼれやすい。それで、つぎのようなことわざが生まれる。

「骨髄で刀を
眠気でウマを」

一行めでは「刃がこぼれる」という意味が省略され、二行めでは「群れをうしなう」という意味が省略されている。類似の表現として、「吹雪のなかで目を、ぬかるみのなかで靴を」もある。「闇に提灯、曇に笠」に似て、必要なときにこそ、実は簡単にうしないやすいのだから、何事にも要注意である。ちなみに、つぎのようなフレーズがくわわると、欲に目がくらんでいるさまをえがくことになる。

「キツネを好んで自分のウマを
骨髄を好んで自分の小刀を」



ヒツジの内臓を脂肪でくるんで料理する

以上のように、小刀は、肉食生活になくてはならないもっとも貴重な道具であり、ことわざの食卓でも、名脇役をはたしている。

さて、

「接吻していて
脳を吸う」

「頭をなぜて
脳を吸う」

といえばいずれも、表面では大切にあつかいながら、内心では害をおよぼそうとしていること、あるいは陰で害をおよぼすことを意味している。つまり、「口に接吻、胸にあいくち」、あるいは「心に刀」や「笑みのうちの刀」ということわざに相当するであろう。『唐書』には「口に蜜あり、腹に剣あり」とある。モンゴルでも「蜜と剣」をもちいるレトリックは成り立つ。また「舌のうえに砂糖、うなじの上に小刀」とか、「ことばは小麦粉、心臓は火箸」といってもよいが、「脳を吸う」という語句がいかにも解剖学的で、肉食にたけた遊牧民らしさをうかがわせる。

解剖学的な観察眼をいかして、家族などの人間関係を表現することもできる。

「骨の折れた部分
肉の切れた部分」

といえば、親戚や子孫の意味だという。わかれてはならない密接な関係、あるいは、もとは一つという関係をたとえたことばである。たしかに、もとは一つだが、よくよく見ると、継目や隙間はあるものだから、

「ウシの肉には節がある
魚の肉には隙間がある」

というと、たとえ近親でも、たがいにへだたりがあるという意味になる。「血は水より濃い」わけではないらしい。

このように、親族については、連帯を表明することもあれば、疎遠を示唆することもある。いずれにせよ、血のごとき液体ではなく、骨や肉の構造でしめすという特徴が興味深い。モンゴルでは、伝統的に、父系出自を「骨」にたくし、母系出自を「肉」にたくしてきたのであった。

解体にたくみな人びとは、家畜のからだの構造について熟知しているといってよかろう。内臓や骨などの部位名称は豊富に用意されている。そうした語彙をうまくつかいわけることによって、ことわざ世界の食卓にもバラエティーがうまれている。

「腎臓は腰に
　痰は胸に」

これは、「適材適所」という意味であると同時に、人に上下の別があることをも表現する。『元朝秘史』にもあらわれる句である。

腎臓は、脂肪の膜につつまれて腰のあたりに位置する内臓である。そうした所在のありように注目して、つぎのようにいえば、

「脂肪につつまれた腎臓
　横隔膜につつまれた心臓」

甘やかされた人、わがままな人を意味するという。

つぎのことわざもまた、内臓の所在をいかした表現である。

「グゼーにはりついた脾臓
　鞍布にはりついた止め金」

グゼーとは、反芻動物の四つのうちの第一胃をさす。脾臓はこれにはりつくように位置する内臓で、あるとはいってもあまるほどでもなく、ないといっても不足をきたすほどでもない、有用性のひくい付属品であると、このことわざはいう。たいしたことはないといいたいときに、この表現をもちいるのである。

グゼーとよばれる胃袋は、比較的大きく、バターなどの貯蔵に利用することができる。詰めものにつかうので、人びとはそのすみずみまで指をおしこむ。そんな作業を想定すれば、

「土地、土地の習慣
グゼー、グゼーのすみっこ」

ということわざが成立する理由も理解できよう。「所変われば、品変わる」であるから、「郷に入れば、郷にしたがえ」にも相当することわざを、こんなふうに内臓の一種で表現しているのである。

グゼーが食糧保存用の格好の素材になることとくらべれば、サルヒナックとよばれる第二胃は、内面がギザギザになっていて有用性に劣る。これらのふたつの胃を良悪の対比にもちいれば、さまざまな効果的表現も可能になるだろう。

「グゼーと一緒にふりはらい

サルヒナックと一緒にはらいおとす」

良いものも悪いものも区別なく消費してしまうことをいう。さらに、心に思っていたことをすべて開陳することをもいうらしい。優れた意見も、つまらない愚痴も、漠然と「腹」にたまるのではなく、それぞれふさわしい胃袋にたまるのである。人間の胃袋は実際には一つだが、思考のための胃袋は、いくつも用意されているとみたほうがよかろう。

「善人と悪人とが一緒になって村になる
サルヒナックとグゼーと一緒になって鍋をみたす」

この並列関係をみると、善人とサルヒナック（第二胃）、悪人とグゼー（第一胃）とがそれぞれ対応しているが、これにはわけがある。善と第二胃とは、頭韻をふむことができるからである。意味のうえでは、善とグゼー、悪とサルヒナックが並行していると考えられる。いずれにせよ、善悪や良悪はともに存在するものであり、むしろ双方がそろってはじめて完全になるという世界観がここに表明されている。

このような世界観にうらうちされた類義のことわざは、いくつもある。

「頭をすねと一緒にして

鍋をみたす」

ここでいう「頭」と「すね」とは、人のそれではなく、ヒツジなどの食べる肉のそれであることはいうまでもない。また、頭部が善良を、すねが粗悪や偽悪をそれぞれ象徴している。ことを成就するには、善悪双方を必要とするのである。こうした世界観をかたるうえで、解剖学的な知識が十分活用されている。

おなじ意味のことわざでも、すでに農民と化した農耕地帯のモンゴル人なら、つぎのように植物性の食品でかたるにちがいない。

「善と悪が一緒になってこの世ができる
ソバとキビが一緒になって年越しの食糧となる」

「良悪の二面がある
ソバには三面ある」

ソバの実に特有の三角錘の形が、ものごとの両面性や多面性にたとえられている。

肉も内臓も、一般にゆでて食べるのが原則である。肉は、冷凍や干し肉にして長期保存を心がけるのに対して、内臓はできるだけはやいうちに食べる。肉は干したものも、干さなかったもの

も、もっぱらそのままゆでるのに対して、内臓はそれぞれの部位にふさわしい工夫をほどこす。

たとえば、脂肪のすくない肺には、脂肪の膜をまきつける。小腸には血をつめる。大腸や胃袋には肉片をつめる。などなどである。こうした肉食生活の智恵が、ことわざの食卓になると、舌であじわう味覚をこえた意味をになうことにもなる。

「草でつつんでもウシは嗅がない
脂肪でつつんでもイヌは嗅がない」

ものの欠陥であれ、人の悪行であれ、どんなにかざってもかくすことはできない。これもまた、『元朝秘史』にもみられる表現である。

非常に風変わりな肉食品の一つとして、睾丸をあげることができる。ほとんどのオスの家畜は、その種類にかかわらず去勢される。そのとき摘出される睾丸は、ラクダのそれをのぞいて、いずれも食される。ヒツジやヤギのもの、あるいはウシのは、ミルクで煮て、ウマのそれは焼いて食べる。去勢作業のときにだけ、また去勢した家畜にみあった数だけしか食べられないから、わたしたちにとって珍味と想像されるばかりでなく、モンゴルにおいても一種の珍味といえるであろう。

この珍味を食べたいとねらっている動物が、ことわざのなかにいる。

「種オスウシの下を見て
キツネが痩せて死ぬ」

これだけではわかりにくいが、類似のつぎのことわざをみれば、意味も想像できよう。

「種オスウシの睾丸が落ちるのを
待っているうちにオオカミが餓死する」

むなしい期待をしているうちに死んでしまうのだから、まさに「運を待つは死を待つに等し」であって、けっして「果報は寝て待て」ではないのである。

天幕

——大草原の小さな家

モンゴル高原の緑の絨毯に、ポツポツと点在する白い天幕は、モンゴル語で「ゲル」とよばれる。木製の枠組みにフェルトのおおいをかぶせた、円形の移動式住居である。

中央アジアにすむカザフ族などのトルコ系遊牧民のテントとよく似ているが、微妙に異なる。カザフのテントは、屋根に相当する木製の骨組みをたわめてもりあげてあるので、背が高い。モンゴルのゲルはそれにくらべると、木をたわめることはほとんどなく、もりあげない分だけ小ぶりであり、全体は円形であるものの、壁や屋根の木製部分はたいてい直線的である。

ゲルが登場することわざに、つぎのようなものがある。

「家の戸は垂直がよい
家の主人は湾曲がよい」

ドアというものは、まっすぐたっているのがよかろう。それに対して、人はまがっているのがよいという。人に対してあたえられている湾曲（ボグトグル）という形容は、本来、背をまげた姿勢を意味する。そんなしぐさに、いったいどんな意味があたえられているのだろうか。たとえば、つぎのことわざの場合なら、

「もらう人は腰をまげ
　あたえる人は腰をのばす」

と、援助を乞うときのしぐさであり、卑屈さを象徴している。逆に援助するときには、腰をのばしていかにも尊大にふるまうというのだから、さしずめ「借りるときの地蔵顔、返すときの閻魔顔」に相当する、皮肉なことわざといえよう。

腰をまげるという姿勢は、このように卑屈な態度としてマイナスに評価されることもあるが、「家の主人」が「腰をまげる」のは、客人に対して親切だからで、「謙虚さ」のあかしとなる。

モンゴルから中央アジアにかけてひろがるステップ地帯のテントは丸くて白い。西南アジアからトルコにかけての遊牧民の多くが、四角くて黒いテントにすまうのと対照的である。黒いのは、黒いヤギの毛でつくるフェルトでおおっているからであり、白いのは、ヒツジの毛のフェルトでかぶせてあるからにほかならない。

ただし、白いテントも雨にうたれ、風にさらされているうちに、灰色にも黒色にもなってくる。

いかに粗末になろうとも、わが家はわが家だし、わが家だからこそあるじとしてふるまえる。そんな真理をことわざで、

「黒いゲルに王
　灰色のゲルに聖主」

という。

ゲルの構造上の特徴は、まずなんといっても、支えるものと支えられるものという対比的な関係がみられないことであろう。柱や梁が用意されていて、それに屋根がかぶさるのではなく、壁も屋根も一体となって、たがいに支えあっている。ゲルの壁は、木の棒をジャバラにくみあわせてつくられた格子で、折り畳み式になっている。この格子状の壁を「ハナ」という。ハナはふつう屋内にいれば容易にみえるものだが、屋外からはフェルトのおおいがあるためにみえない。したがって、ハナと名指しをすれば、ゲルはゲルでも屋内をイメージさせることができる。

英雄の項で言及した「死」をめぐる二つのことわざでは、屋内で生まれることを「壁のすそで生まれる」といい、生きていることを「壁の家」にいるといった。そのような「壁」とは格子状の「ハナ」にほかならず、われわれが「畳の上で」というときの「畳」に等しいのである。

つぎのことわざにみられる「壁の穴」は、格子状の格子の部分をさしている。

「壁の穴から入ってきて
戸から出ることができない」

小さな格子から入れたのに、大きな戸から出られないのは、痩せてやってきた人が太って帰ろうとするからである。その貪欲ぶりが批判されている。

格子状の壁は、いわば穴だらけなので、「壁に耳あり」とは不適切な表現になろうし、フェルトはあっても障子はないから「障子に目あり」とはいえない。そこで、

「家のなかで話すとき
家の背後に人がいる」

という。家の構造がちがっても、同じような心理がはたらくものであり、同じ真理としてことわざがつくられるようである。ただし、家の構造が簡単なモンゴルでは、壁や障子をさししめすかわりに、壁の内側と外側とがうまくつかいわけられている。それはまた、小さく丸くかぎられた内なる空間と、無限に広がる外なる空間との、大いなる対照でもある。

ハナとよばれる格子状の壁を五、六枚ひろげて円形に立てる。まん中が、家の中心になることはいうまでもなかろう。そこが伝統的ないろりの位置である。この中央から暖をとり、そこで煮炊きもする。「ゴロムト」とよばれ、いろりであると同時に、その家の中心であり、火の神の座で

草原を移動するすまい

あり、ひいては家系の象徴でもある。今日では、泥土をもちいてそこにかまどをもうけておく家もある。いずれにせよ、ゴロムトは家のなかでもっとも大切なところであるから、つぎのようになってしまっては一大事というものであろう。

「ゴロムトに
　韮がはえる」

「ゴゴド」とよばれる野生の韮がはえている。人びとが移動したあとの草原にはえるならともかく、いろりあるいはかまどに野草がはえるということは、それを使用していないことにほかならない。家系が絶えたことを意味している。まったく消滅したという意味、すなわち「全滅」が右のようにたとえられるという。

ゴロムトには、五徳が設置されるものである。五徳には、大きな鍋をかけて煮炊きする。五徳も鍋も鉄製であるのに、

「五徳を皮紐でつづり
　鍋を羊皮でつくろう」

とすれば、しょせん役には立たない。自己満足にほかならない。

ゴロムトの真上には、「トーノ」とよばれる天窓がある。直径四十センチメートルほどの円形をした木製の窓枠で、いろりの真上にあるから、煙出しにも最適である。ちょうど家の中央にあって光をとりいれる天窓は、家のかなめに相当するらしい。

「家のかなめは天窓
腹のかなめは食事」

また、天窓は家のなかでもっとも背の高い部分である。そこから天をあおぎみることもできるが、

「天窓で天をはかり
鍋で海をはかる」

ようでは、「己をもって人をはかる」に等しく、あさはかというものであろう。浅薄な知識で推量することを風刺するために、天窓がもちいられている。家にとっていかに大切で、天につながる部分であるとはいえ、空の広大さにくらべれば、ごくごくちっぽけな円にしかすぎないのである。

ゲルということばは、家は家でもその構造物をさししめす。内容をさししめしたいとき、つまり家庭という意味なら「アイル」ということばをつかう。したがって、アイルとゲルは、中身と器の関係にあるといえよう。

「他人のアイルへ出かけるときは秋
自分のゲルへ来るときは春」

人の家庭を訪問するときと、自分の家にだれかが来るときとがこのように対比されている。それぞれに呼応させてある秋と春とのあいだで、どちらが苦しい季節かは明白であろう。人をたずねるときには、富める秋のごとく贅沢をするのに、人をむかえるときには貧する春のごとく節約をする、というわけである。

移動式住居に豪勢な家具は似あわない。無駄のない簡素な生活こそが移動の自由を保障する。わずかな家財道具の一つとして、アブダルとよばれるものがある。ながもちタイプの簞笥(たんす)である。

「アイルをさがすより
アブダルをさがせ」

といえば、「みずからをたのみて、人をたのむべからず」に相当しよう。同様に「遠くをさがすより、アブダルをひっくりかえせ」ということもある。

家庭「アイル」のなかにある家族の秩序は、家「ゲル」のなかにある座の指定によってたもたれている。戸口を入って右側が主婦をはじめとする女性の座であり、家事用品が配列されて、台

所ともなる。戸口を入って中央の奥の座が家の主人の位置であり、仏壇や神棚が設置されるところでもある。「ホイモル」とよばれるこの奥の座から、主人をおいやることができるのは、よほどの賓客といえよう。

「戸をえれば
奥の座にあこがれる」

家に入るやいなや、さっそく奥の座を所望するとは、なんと貪欲かつ傲慢な態度であることか。奥の座をえるには、あせらないにかぎる。

「あとで来た人が
奥の座をえる」

いかにも「のこりものに福がある」ように思われる。ただし、このことわざは、皮肉にもちいることのほうが多いらしい。つまり、何にもしてないくせに、何の実力もないくせに、という非難がこめられているという。

伝統的な座の秩序は、いまも草原でしっかりとまもられている。だからこそ、ことわざのなかの家に、いろいろな性格の人物を配することもできるのである。

雪害

――一夜の悪夢

モンゴルでは「ゾド」とよばれる雪害がもっともおそろしい自然災害である。冬になると、大陸性の高気圧が支配して、気候は比較的安定する。したがって、一夜にして家畜が雪にうもれるといった心配はむしろ少ない。人びとがおそれているのは、寒気団が暖気団といれかわるとき、すなわち春である。春は、モンゴル草原の遊牧生活にとってけっして心おどるときではない。

「春の日は
半分半分」

春の天気が変化しやすいことをさしており、このことわざで終始一貫しない人の性格をあらわす。

「おしゃれな人の

死は春と秋」

といえば、過度に身をやつすことをいさめたことわざである。春と秋は寒暖のうつりかわる時期であるために天候がもっとも不順であり、しかも草原ではそれが致命的な自然災害になる。それゆえに、「だての薄着」もこんなにぶっそうなことわざに脚色されている。

一夜にしてすべての家畜を失うかもしれない雪害もまた、もっぱら春につきものである。

「富むのに三年
窮するのに一夜」

「金もちでも一度の雪害で
英雄でも一本の矢で」

すなわち、「おごれるものは久しからず」というわけである。雪害は、貧富の差なく天があたえる試練であるから、社会的にはむしろ公平というべきかもしれない。

「多くの春に一度」

だれにでも、どうしても、一度はおとずれるものであるという人生の諦観さえ感じられる。さらに、つぎのようなことわざになると、どんなに被害にあっても絶望する必要はなさそうである。

「雪害は一年
法は千年」

雪害の苦しみは消えるものだが、恩義はけっして忘れることはできない、人の援助は永久に記憶にのこるという意味をあらわすという。その意味するところは、つぎのことわざとあわせよめばより明瞭になるであろう。

「悪いときは一年
悪い名声は千年」

ここでいう「悪いとき」というのが、具体的になにを意味するかはもはやいうまでもない。「人は一代、名は末代」ということわざと同様に、名声や名誉を大切にするように強調したことわざではあるが、その表現方法において大きな文化的特徴がある、といえよう。

人びとはつねに雪害をのりこえて遊牧生活を維持してきた。そうした民族の自負とでもいうのだろうか。すぐれた状況はみな困難をへた結果である、とつぎのように教える。

吹雪の日にも放牧を休まない

「夏の泉には
雪害の春があった」

なかには、雪害をまったく気にかけない、意にも介さないというつわものもいる。

「夏に太らない
雪害に死なない」

夏に太らないのは尋常ではなく、チャンスを利用しないという点で好ましくないことではあるが、かといってピンチにさほどのダメージもうけないのだから、悪いことでもあるまい。いつも一定していることを、このように表現する。

さて、人びとが苦しんでいるときに利をむさぼるものがいるのは、世の常というものであろう。

「雪害になるとイヌが肥える
困難になると貴族が富む」

モンゴル語でイヌは「ノホイ」といい、貴族は「ノヨン」という。先に「貴族」の項でのべたよう

に、この二つの単語はしばしば連想されやすく、デュエットしやすい。イヌや貴族のような悪人は、雪害のようなときこそを好機ととらえて、人びとをさらにむしばむというわけである。

しかし、ふつうの牧民たちは、雪害を利用することなどできない。

「非難は兄に
雪害は種オスウシに」

雪害にもっとも弱いのはウシで、とりわけ種オスウシは弱いといわれている。そのような経験的事実がくみこまれたこのことわざの意図は、最初の一行めにある。長兄のものがまず責任をとるべきだという意味でもちいる、という。

ゾドの被害を最小限にとどめるために、人びとができることといえば、干し草などをたくわえて万一にそなえることだけであろう。

「秋に草をつんでおかないと
春に死体が山となる」

秋のうちに、滋養にみちた草を刈り取って干し草をつくっておけば、雪害だってこわくない。まさに「備えあれば憂いなし」というものである。

干し草あれば憂いなし

雨

――天のおつげ

モンゴル高原の大地は、四月になってもまだ黄色い。黄色い大地を緑の絨毯にぬりかえるのは、いうまでもなく雨である。雨という自然のめぐみは、とかく気まぐれである。乾燥気候に属するモンゴルではなおさらで、まず量が不確定であり、なおかつ時期が不確実である。そのような自然現象のもつ不確定性は、とりもなおさず、天からの兆しとしてうけとめられる。

「吉祥の雨はまえに
　寡婦の埃はあとに」

ここでは、「吉祥の雨」というように雨が吉祥として形容されており、良い兆しの典型としてえがかれている。ことわざ全体としては、良い兆しがあるとはいっても、悪い兆しもあるという意味になるらしい。すなわち「禍福はあざなえる縄のごとし」に相当するのである。

このように、雨というものは、それ自身が吉祥であると同時に、吉祥の兆しでもあるのだが、雨になるまえに、いくつかの兆しをともなうものでもある。

「雷のなる天に雨はなし
浮名のある娘に宴はなし」

雷がなれば、人びとは雨を期待する。しかし、ゴロゴロと音をたてるわりには、雨が降らないことも多い。「泰山鳴動ネズミ一匹」になりかねない。とかく噂のある娘ほど、結婚には縁がなかったりする。虚勢ばかりはっていると最後に空手におわる、という教訓をこめて、右のようなことわざをもちいる。

雷がこうして雨のまえぶれにおわってしまうのに対して、霧は成長してゆくことで雨にいたる。

「霧が老いれば雨になり
娘が老いれば姑になる」

ものごとはすべて、小から大へ、新は旧に、と変化してゆくという道理をかたったことわざであるという。霧を雲といいかえてもこのことわざは成り立つ。

雨をもたらすはずの雲も、風には弱い。風が強いとき、モンゴルの人なら「雨にはなるまい」

とあきらめる。

「雲は風にたえられず
朝の露は太陽にたえられない」

脆弱なものは厳しい試練にたえられない、というのである。風のもとでは、せっかくの雲も「朝の露」のごとくはかないものと化してしまう。

ところで、これまでかかげた雨の登場することわざをみるかぎり、雨をめぐる一行めにつづいて、二行めにはしばしば女性が登場する。雨はどこかしら女性のイメージとむすびついているらしい。日本でも「女心と秋の空」などというように、女性のうつり気なさまが天候の不確実性とむすびつけられることがある。もっとも、「男心と秋の空」ということわざも成立しているが。

モンゴルの場合、雨は不確実性を象徴するばかりでなく、緑というめぐみをもたらす貴重な天然資源であるからこそ、その豊饒性ゆえにもっぱら女性とむすびついているのかもしれない。

雨をめぐる兆しはまた、つぎのように「天の穴」として表現される。

「降る天の頂には穴がある
晴れる天の腹には穴がある」

雨が降るにしてもやむにしても、天の穴のようにみえる雲の気配があるように、すべてのことがらには、それなりの兆しがある、とことわざはいう。

雨にさきだって一陣の寒風がとおりすぎてゆくこともある。

「雨のまえに寒風
オオカミのまえにカラス」

同様の句として、「雨のまえに土、オオカミのまえにカラス」ということわざもある。雨が本格的に降りはじめるにあたって、一滴二滴としずくをうけた大地は、土のにおいをたちのぼらせるから、そのように表現するのであろう。いずれにせよオオカミと並列されているために、主として悪いことには前兆があるものだという意味でもちいられる。用心せよ、というわけである。

非常によく似てはいるが、つぎのバージョンの場合には、他人に対する用心ではなく、自分をいましめる文言になっている。

「雨のまえに寒風
まちがいのまえに愚行」

みずからに対するこうした訓戒なら、まさに「ころばぬさきの杖」に相当するであろう。雨にち

夏の草原に雨のベールがわきたつ

なんで、「ぬれぬさきの傘」に相当するといってもよい。

まったくその逆に、ぬれてから傘をだしても、「あとの祭り」というものである。モンゴルではつぎのようなことわざが用意されている。

「すぎさった雨のあとに
雨合羽を着る」

さらに簡略化して「雨のあとの雨合羽」ともいう。泥棒がきてから縄をなうという「泥縄」どころか、まったく無意味な行為であり、無駄な努力というものである。

ただし、モンゴルの「雨合羽」のことわざは、時宜を逸することをしめす以外に、もう一つ別の意味でもちいられることもある。すでに終わったあとで、いかにも前から知っていたかのように賢者ぶることを非難するのにももちいるという。合羽が、身にまとう衣裳の一種であり、衣裳というものはしばしば虚飾を象徴するからこそ、そうした非難の的にもなるのであろう。そもそも草原にくらす人びとは、特別に傘や合羽などを用意してきたわけではなかった。降るなら降ったで、ぬれればままよ、である。それなのに、ごたいそうにも雨合羽などを着込んだりするから、尊大ぶる人物の表現としてつかわれるのであろう。

雨にぬれれば、モンゴルではつぎのようになる。

「雨にぬれた人は
露をおそれない」

苦労した人は、些細な困難をものともしない。雨にぬれてこそ、人はたくましくなる。「艱難なんじを玉にする」の「艱難」は、モンゴルではまさしく「雨」であり、また「雪害」なのである。

ちなみに、雨は降ってもかならずいつか、やむものだ。このまぎれもない真実を、モンゴルではつぎのように連句にして、宴会のお開きにもちいる。

「降った空は晴れる
来た客は帰る」

このようなレトリックをもちいることによって、楽しい宴会でもじょうずにいとまごいを果たす。